



人間学としての仏法と医学

元駒澤大学教授
立山寺住職 真田智光

1. 仏法は人間学なり(仏法と医学)

私は仏教は人間学だと思っている。仏教は基本的には人間が社会生活をなすにあたって、「人生はいかにあるか」ということを正しく知り、そこから「人間はいかに生きるべきか」という社会・人生の理想を見出し、その理想に向って進んでいくことを説くものである。それは広い意味での人間学であるということが出来る。人間学であるから、それは人間全体を向上させ、それによって人々の心に平穏を与えるものである。心の平穏とは周囲の環境とは無関係に、主観的な自分の心だけが満足すればよいというものではない。周囲の客観的な社会環境、政治や経済の状態も理想的なものになってはじめて得られるものである。

仏教は人間学を説くものであるから、狭い意味でのいわゆる宗教だけのものではない。人間である以上は誰でもそうしなければならないことを説くのであるから、それは宗教とか仏教とかいう名前を使用しなくてよい。そこに説かれるものは古今東西を通じ、人間が人間として守らなければならない規範であっ

て、仏教ではこれを法(ダルマdharma)と呼んでいる。即ち仏の教えもしくは仏の教えを通して説かれる真理を「法」とよぶ。故に仏法は仏の説かれたおきとしてであり、経は「法」を内容とする。故に仏教と仏法は同意義であり、仏の教えを仏教といたり仏法として表現したりすることがあっても特別な意図はないのである。ただ強いていえば仏法は法・哲学の方面を強調するに対し、仏教は信仰・修行という面に焦点をあてているとでも思って頂きたい。

仏教即ち仏法(これからは仏法の名称のもと話をすすめる)の出発点は、生老病死という人間存在にもとづく本源的な苦悩の解決にあった。それ故苦からの解放の道を示した教えということが出来る。ところで医学という学問も、仏法者の側からみれば四苦のすべてに関わる。病者に焦点をおきながらも、死ぬこと生まれること老いることのすべての人間苦に関連をもたざるを得ない学問であるともいえましょう。故に仏法と医学の関係は、人間生命の根源的な苦悩において接触し、その苦

悶を抜く方途を異にしながらも出発点と目標とを共にしているようである。一口に医学といっても、近代科学を基盤にした西洋近代医学もあれば、東洋の自然哲学に立脚した漢方医学、もしくは最近注目されている中国医学等があるが、共に苦を抜く解決をせんとするものである。仏法もまた苦より出発、目的を同じうするとすれば、西洋近代医学、漢方医学等と異質な内容を包むとはいえず、一悩める心を救うことを内容とす—これらの医学に対し仏法医学という言葉を使用してもよいと思う。事実釈尊は経文の中で大医王として説かれているところもあり、仏教医学という言葉を使っている学者もいる。

仏法を医学的に見た場合の対象は病気ではなく病者である。四苦にあえぐ人間存在自体であり、その治療は四苦を転換する仏道修行ともなる。このような人々の苦悩を治療し、健全なる心身をもたらす、まことの人間を現出させんとする仏法的治療は、今や仏法者の自負心にすぎないといわれるかもしれない時代は過ぎ、明日の人類のために必要な医学であり、主要な役割を果たすものと考えて。そして特にこのような仏法的治療は、農村に焦点をおきながら進めるこの研究会、イメージが変ぼうしつつある農村自体の向上と、広く人間の健全なる心身を目標とするこの研究会に、深い関連性ありと思うものである。次に仏法の基本理念と医学との関係について述べてみよう。

2. 仏法の基本理念(仏法の医学的基盤)

釈尊が自分の教えをはじめて説かれた最初の説法(初転法輪という)は四諦である。四聖諦ともいう。4つの神聖なる真理を説かれたのである。苦諦集諦減諦道諦である。第一の苦諦は、この世は苦であるとの真理—人生は楽なりといって見ても、表面の華やかさ騒々しさが多くなければなるほど、皮肉にも「人生は苦なり」を証明す。—第2の集諦は、苦

の原因は人間の身勝手な執着にあるとの真理、第3の減諦は、執着を超えることが苦を減した悟りの世界であるとの真理、第4の道諦は、減諦達するためにはどのような修行しなければならないかとの真理である。この四諦を医学と関連させていえば、苦諦は病相の診断であり、集諦は病因の発見であり、減諦は理想的な健康体であり、道諦はその治療法である。それでは仏法的立場より病因の発見について述べてみよう。

(四 諦) (医 学)

苦諦 (苦悩・迷い) — 病相の診断

集諦 (煩悩・誤れる欲望) — 病因の発見

減諦 (涅槃・苦の減した世界) — 理想的な健康体

道諦 (修 行 法) — 治療法

3. 仏法における心の捉え方(病因の発見)

私達はお互いに肉体の病気にかかるが、現代の社会生活においては、特に肉体を病んでいる人と同じほど心を病んでいる人が多いと識者によっていわれる。即ち心の病気にかかり易いのである。この心の病因の発見は仏法よりいえば集諦である。

先日N・H・Kテレビにて、医学的にいえば年齢に応じての心の病気が起こりがちだとの発表がありました。即ち6才～12才学童期には登校拒否症、13才～19才青年期にはノイローゼ、精神分裂症、20才～44才成年期にはノイローゼ、うつ病、45才～64才初老期にはうつ病、65才以上老年期には老人性痴呆症になりがちだと。ノイローゼは精神的傷害より起こる。うつ病は一口にゆううつ病といってよい。ものうく、無口になる、世に何の望みもなくなる。—最愛の肉親に死別した心理に例えることができるといわれる。—うつ病誘因は仕事の過労、職務異動、精神的打撃、経済問題、家庭内葛藤等によるが、45才過ぎるとノイローゼ、うつ病が多くなる。老人になるにしたがって心の病気にかかりやすいとも説かれていた。その対策として環境調整し、ストレスを取

ることであるが、第1は本人の心構えである。病気とは身体の抵抗力が病気（菌）に負けたことであり、その弱い体は心がつくる。家庭内、社会生活の摩擦が不安、悩む心をひきおこし体を弱くするといわれる。

このような心、仏法では基本的にどのような捉えているのであろうか。仏法で捉えている心の姿とは、釈尊の迷いからの解放、目覚められた世界である成道の世界が仏教の根幹ゆえ、ここから考えてみるのが至当と思う。釈尊は悟りを開かれて、そのまま菩提樹のもとでずっと禪定を続けておいでになる。そして人生の理実を、煩惱などによる生死の苦しみの発生を12の連鎖関係によってたかめられたといわれる。これが十二縁起説である。無明から始まって行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死である。無明とは人間の心は全く無知である。社会・人生の理想を達成するための正しい世界観や人生観がないことをいう。専門的に言及することは割愛させていただくとすれば、人間は根本の無知に始って生活というものが展開し、そして人生に苦悩や不幸がおこる。その根本原因はこの無明にあるとされる。そういう現実の姿を釈尊は禪定に入って観察されたのである。それと同時にその逆の関係も観察される。無明が消えると最後の老死の苦悩も消える。前者を順観といい後者を逆観といわれる。何れにしろ真実を真実と知らないから、ものの考え方もそこから起こる行為や態度もすべて誤ったものとなり苦の生存となる。無明や愛着などの煩惱を取除くと苦悩も消える。すなわち涅槃に達する理想生活が出来るといわれるのである。

4. 生命をいかす(理想の健康体)

苦を減し幸福になり得る道は、世の真実を見極めて際限のない欲望の対象を追いかけることをやめ、与えられた因縁をそのまま受けとめて、与えられた条件（縁）に不平不満

を持つことなく、自分の努力（因）をよりよくいかして一精一杯はげむ。そして更にこの世は自分で生きている人生ではなく、他の多くの人々に支えられながら生きている人生、生かされている人生、その人生に対する感謝の心をもつこと、それに目覚めて生活することだといわれる。“生命をいかす”とはそういうことであり、このような生活をするのが減諦であり理想の健康体である。それでは理想的な健康体、減諦に到達するにはどのような治療法か、仏法からいえば道諦・修行法が説かれるのであろうか。

5. 仏法の根本的教え(治療法の特徴)

“生命をいかす”基礎ともなる仏法の治療法の特徴とでもいうべき、仏法の根本的な教えとはどんな教えであろうか。一つは、時が流れる、その流れの中に私達はいる。万物流動の理を明らかにし、諸行無常として説かれる。それ故1日1日一時一時を大切にしなさい、努力しなさいといわれるのである。第2は、私達は社会的動物として社会から離れて生活することは出来ない。相寄り相助け持ちつ持たれつの生活が私達の生活であり、因縁所生として説かれる。故に常に他に対する感謝の気持ちを持ちなさいといわれる。それ故努力と感謝は仏法における重要な教えである。そして現実の自己はといえば、この時の流れの縦の線と持ちつ持たれつの横の線、即ち時間と空間の交叉点にいつもいるという。この交叉点で、人間は生まれここで働きここで死んでゆくのである。この交叉点の処を仏法では諸法無我という。あらゆるもの（法）には実体なし無自性だといわれるのである。即ちあらゆるものに固定的な実体はなく、この現象界目に見えるものすべて、私達の肉体を含めてかたときも止まらず必ず移り変わり壊れゆく存在であるといわれるのである。それを見きわめよといわれるのであり、執着を離れおれがというはからいを捨てよといわれるので

ある。これ仏法の世界観ともいえるでしょう。

このことを更にいえば、「仏法のもの見方考え方」ともなる。即ちこの世の中をどう見るかといえば、形あるもの壊れると見るのです。しかし、ここに止まっていたは空しい人生となり、虚無的人生観におちいりがちとなる。レジャーに逃避したり自殺をはかったり意味ない暴行をとりがちとなる。故に形あるもの壊れると対決することこそ大切、特に現代人に必要というべきである。現代人は空しさを感じているのですが、そこから何も学ぼうとせず空しさをごまかすことに懸命です。無気力になったり、レジャーに逃避したりする。空しい人生ではありません。しかし空しさを感じるところに人間の進歩もあるので。故に仏法では空しさに徹せよといわれる。空しいがままの充実こそ、そこに別次の風光ありといわれるのです。空しいがままの充実こそ仏法の人生観というべきである。一輪の花を見ても単に美しいなあと見るだけでなく、この花もいつかは萎む花散る花、しかしいまは精一杯咲いている、しっかり生きているすばらしいなあと見ることが大切だといわれるのです。「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪冴えて涼しかりけり」祖師の歌ですが、天地自然の風物が四季を通じその時その場で行わねばならないことを、きちんと行っていることを示されたものです。本来の面目を歌われたものです。空しいがままの充実です。空しい人生ではありません。この現実を肯定し空しいがままの充実こそ、お互いの人生の花ざかりが展開されるというべきでしょう。故にこの空しいがままの充実こそ仏法的治療法の特徴というべきである。そして今日注目されつつある座禅は、医学的面よりみれば神経症等心の病気に対する最後の仕上げでありトレーニングである。仏法的治療法からいえば

心を調える訓練とでもいうべきでしょう。

ではこの治療法の特徴を社会的に生かしてゆくには、どのような生活すればよいと説かれるのか。日常唱える経文より教えられることは、一つは、他を思う心思いやりの心である。人間はまことに自己本位である。しかし他を思う心こそ家庭、社会生活の潤滑油となる。二つは、けじめをとうとぶ心である。欲望に動かされがちな私達、規律こそ大切である。自己にあっては生活規律、集団にあってはルールの尊重、社会生活にあっては公德心、道義心こそ大切なり。三つには、美しいものを見る心、美しいものを見ようとする心、醜いもの暗いもの見がちな人生において美しいものを見る心見ようとする心こそ、相手を尊敬する心ともなり、いのちの尊さを第1とすることにもなる。四つには、自分をふりかえる心である。他人の非ばかりに眼をむけず、自己を見つめる自己をふりかえる一時こそ、日常の疲れきった頭脳を慰すことにもなり、また落着きある品格、情操も生まれてくることになる。欲望追求は破滅への最短距離である。ふりかえる心こそ我欲自制となり全体の調和、平和にもつながることになるであろう。このような心をもって日常生活し、幸せを得よといわれるのである。

それ故に仏法では特に「平常心是道」のもと生活せよ、平常の心掛けを大切にせよといわれる。お茶を飲みご飯を戴くのもこれまた道である。我見我欲の生活は禍を招くと。故に私達の生活態度は、「朝には希望に起き昼には努力に生き夜には感謝で眠る」の生活態度こそ大切であり、この様な生活するところ日々是好日となるであろう。これ苦からの解放の世界、滅諦に達するための道諦であり、仏法的修行法治療法であるといえるでしょう。